



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

「楽しく学ぼう！」

ライブミュージアムと地域の子どもたち

vol. **31** | 季刊 2014 **春**



CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol.31 | 季刊 春
2014

表紙写真

「あっ、タイルに顔が映ってるよ」「見える、見える」。自分たちの発見に大喜びの子どもたち。家族ぐるみでおつきあいする2家族が、久しぶりに一緒に休日を過ごしました。みんなで見学すると、好奇心も、楽しさも、アップしますね。
(2014.2.15)

撮影：加藤弘一

01 [特集] 「楽しく学ぼう！」 ライブミュージアムと地域の子どもたち

LIVE REPORT

06 開催報告

企画展 建築の皮膚と体温
—イタリアモダンデザインの父、ジオ・ポンティの世界
[トークセッション] ジオ・ポンティの軽やかな感覚世界
[街並み・建築ツアー] トラフと見て歩く、常滑の“建築の皮膚”

企画展 ラスター彩タイル—天地水土の輝き
[関連セミナー] ラスター彩陶をつくる

時代をつなぐタイルたち 常滑高校卒業作品より

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

企画展 手のひらの太陽—「時を知る、位置を知る、姿を残す」道具

企画展 タイルが伝える物語—図像の謎解き

ゴールデンウィーク特別イベント
みんなでしゃぼん玉を飛ばそう



特集

「楽しく学ぼう！」 ライブミュージアムと 地域の子どもたち



できた!



常滑西小学校のやきもの体験授業「いえをまもるかみさまをつくろう」で取り組んだ作品がついに完成し、お披露目となった今年2月の授業参観日。
「おかあさん、見て！」という声が、校内のあちこちから聞かれました。
「博物館へ行こう」の授業の後でテラコッタパークを見学し、その迫力に口をポカンと開けていた子どもたち。その様子を見た先生が、「子どもたちにもつくれませんか?」ともちかけてコラボレーションが実現しました。



テラコッタを夢中でスケッチする子どもたち。陶楽工房の講師が学校に出かけて、「守り神」づくりを指導。「常滑の土でものづくりができて子どもたちは幸せですね」と下谷環先生。写真提供:常滑西小学校(頁下の5枚)



常滑から※
30

常滑クラフトフェスタ

常滑クラフトフェスタは2008年に、ライブミュージアム隣の旧常滑高校跡地で始まり、今年で7回目となります。「常滑のファンづくり」を目的に、地元陶芸作家、店主、企業が中心となり運営しています。昨年は2日間で2万5千人の出入を迎え、大盛況でした。常滑クラフトフェスタも、ものづくりの街常滑を内外にPRする役割を果たし、今では観光客や市民にとって春の恒例イベントとなりました。昨年は、海と空に開かれた街常滑の新しいエリア「ゲートシティ・りんくう」で開催されましたが、今年は再び旧常滑高校跡地に戻り「FUN!一緒に楽しもう」をテーマに、5月3、4日に開催されます。
陶・布・革・木・ガラス等、全国各地から個性豊かなクラフトマンが集まり、フードコートでは「知多半島のつまいもん」が味わえます。PLAY ROOMではワークショップを通じてつくることの楽しさを体感しながら、参加する人たち同士の繋がりを感ずる事ができます。買って、つくって、遊んで、食べて、ゴールデンウィークを常滑で一緒に楽しみましょう。

磯村司(ワークショップ担当)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できことなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

子どもの目線で ミュージアムを見直す

はじまりは2009年、常滑西小学校の教諭とライブミュージアムのスタッフとの出会いです。

スタッフに展示の説明をしてもらいながら見学した教諭は、以前に一人で見学したときは比べものにならないほど、タイルについて興味をわいたといいます。「人との出会いも大きく影響しました」とも。その経験を見学の学習に活用できないかと考えて、「一年生の授業をライブミュージアムでできませんか」と、もちかけたのです。

その方針は明快でした。単に博物館に引率するのでなく、専門知識をもつ博物館と協働で学習目標を教材化すること。そして、地域の博物館で働く人との出会いを演出すること。この申し出は、ライブミュージアムにとっても得難いものでした。子どもの目線で活動する必要性を感じていたのでした。

「子どもの目線での表示、読める文字は何か、どうしたら興味を持ってくれるかなど、先生にご指導いただきながら、今までにない視点でミュージアムを見直すことになりました」と、当時の担当スタッフ。準備には約半年をかけたが、この経験は貴重な財産になりました。

学校との協働で生まれた オリジナルの授業

試行錯誤の中から生まれたのが、「博物館へ行こう」という授業。博物館の仕事や見学のマナーを学ぼうというもの。教材も手づくりのオリジナル。敷地内にある、子どもに人気の標識をアレンジしたキャラクター「とまれちゃん」と「とまれくん」に先生とスタッフが扮しま

す。見学マナーの合言葉は「はし・さっ・さ」。走らない、騒がない、触らない。事前の出張授業でこれらを説明し、日を改めてミュージアムに来てもらいます。「スタッフが待っているから来てね」と呼びかけ、人と出会う楽しみ、ワクワク感も演出します。

当日、館長から出された指令は、クイズを解きながら館内を巡り、正解の文字を集め並べるといふもの。最後に「たいるはかせ」の称号がもらえます。これは、現在も形を変えて展開されています。

窯のある広場・資料館 リニユーアルに活かされた経験

昨年の10月、常滑西小学校4年生が「もっと常滑を知ろう」という総合学習の課題でライブミュージアムにやってきました。1年生のとき、「はし・さっ・さ」の授業を受けた子どもたちです。事前に代表の子どもたちがミュージアムを見学して、窯のある広場・資料館を見学することに決定。スタッフといっしょにクイズをつくり、それを全員に配って館内を巡りました。

「大きな窯の中に入ったリ、穴を覗いたり、土管をくぐったり。体験しながらの見学は児童の学習意欲を高めたようです。展示の説明も「れんがから汗みたいにじわじわ出てくる」「にゆるにゆる」「どかーん」などの表現が子どもたちの心に残ったようです」と、担任の菊永真由美先生。

2010年の資料館リニユーアルでは、小学校とのコラボレーションで蓄積したノウハウを活かすように心がけたので、こうした評価はうれしい限り。

3年ぶりに授業でライブミュージアムにやってきました子どもたちは、標識を見つけて「アッ、とまれちゃん」と「とまれくん」だ。思わず走ってしまった友だちに「はし・さっ・さ」と声をかけ合っていました。



「もっと常滑を知ろう」
常滑西小4年生

窯のある広場・資料館見学



写真提供：常滑西小学校 ♡を除く



「博物館へ行こう」
常滑西小1年生
出張授業&
世界のタイル博物館見学



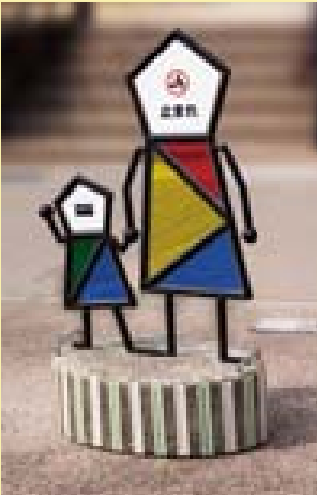
先生(左)と館長が博物館見学のマナーを寸劇で教える出張授業



ライブミュージアムの見学を終え、クイズの答え合わせ



子どもたちからの見学のお礼の手紙(右)と館長からの返事 ♡



ライブミュージアムの標識 ♡

「常滑の魅力」に出会う きつかけをつくる

やきものでできた大型の建築装飾材テラコッタのコレクションを間近で見られるテラコッタパークに、南陵中学校2年生がつくった「町の守り神」が展示されたのは、昨年のこと。

全国的にも有名な窯業地に住んでいることを生徒たちに知ってもらいたい、と相談を受けたライブミュージアム。美術担当の加藤秀子先生の提案を受けて、「私の町の守り神をつくらう」をテーマにした連携授業がスタートしました。

美術の授業であると同時に、常滑の魅力を学ぶ。そのためには仕掛けと工夫が必要です。「守り神」については、地元の多賀神社の氏子総代に話を聞き、ライブミュージアムでは館長がテラコッタの歴史的背景を語る事前授業を実施。とこなめ焼協同組合の協力を得て「古常滑の土」を使い、陶楽工房の講師の指導で制作が行われました。

「地元にこだわった作品展ができました」と加藤先生。ライブミュージアムは、子どもたちと常滑の懸け橋になれば、と願っています。

ミュージアムと学校との連携

もっと多くの先生たちにライブミュージアムの良さを知ってほしいと動き始めたのが、三和小学校の中山知恵子先生。「校外学習のヒントになれば」と、昨年の夏休みに、常滑市内の三和、大野、青海3校の先生に呼びかけて研修会を開催しました。

そのとき配ったのが中山先生お手製の「鑑賞ノート」。楽しめるポイントは何か、触って確かめてほしいものがあるか、お気に入りにはどれか。中山先生がライブミュージアムに出かけて鑑賞したり、スタッフの話の聞いたりするなかで、「ここは見逃さないで」というポイントをもとに、参加者自らが探し、書き加えていく形でつくられています。

「子どもを楽しませるには、教師にも楽しいって思ってもらわない」と中山先生。研修会では「ノート」片手にグループに分かれて見学。先生方の感想は、「国ごとにタイルの絵柄がちがうことにびっくりした」「常滑の産業の歴史的な背景がよくわかった」など好評で、「子どもたちも興味を持ってくれるはず」と手ごたえをつかんだようです。

中山先生から見ると、ライブミュージアムは校外学習のヒントがいっぱい。「自分たちの街にこのような施設があるって、すごいことです。まず先生たちに体感してもらい、子どもたちが自ら感じ取れるような授業をつくっていききたいですね」。

やきものの街で育つ子どもたちが、誇りを持って街の魅力を語れるように、これからもさまざまな形で学校との連携を深めていきたいと思っています。

思い出をつくる 卒業制作の場



「やきものの街らしい作品を卒業記念につくらせたい」。そんな先生たちの希望を受けて、陶楽工房では小学校の卒業制作のお手伝いをしています。「長く残る作品なので、全体としてまとまりのあるように気を配っています」と、指導する陶楽工房の講師。館内の展示物も、大いに制作のヒントとなっているようです。

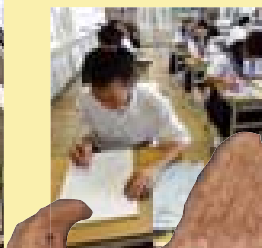


卒業制作に取り組む西浦南小学校の6年生。原画(上)を分割して一人ひとりがタイル画を描き、焼き上げる。完成したタイルは、子どもたちが毎日出入りする昇降口の壁を飾る。



資料・写真提供：三和小学校

「鑑賞ノート」片手に研修会



個性豊かな114の「守り神」が完成

p.4写真提供：南陵中学校(◆を除く)